

ぜんぶ、フィデルのせい

2007(平成19)年12月7日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



第1章

ハリウッド映画もいよいよ変容か？

監督・脚本＝ジュリー・ガヴラス／出演＝ニナ・ケルヴェル／ジュリー・ドバルデュー／ステファノ・アコルシ／バンジャマン・フィエ／マルティンヌ・シュヴァリエ／オリヴィエ・ペリエ／マール・ソデュップ／ラファエル・モリエール／マリー＝ノエル・ボルドー／クリスティアナ・マルクー／ティ・タイ・ティエン・グエン（ショウゲート配給／2006年イタリア、フランス映画／99分）

……この変わったタイトルを理解できる日本人はいないのでは……？ フィデルとはキューバのカストロのこと……。フランスは1968年に「5月革命」が起り、チリでは1970年にアジェンデ政権が誕生！ またスペインでは？ ベトナムでは？ キューバでは？ 9歳の少女アンナの視点から見る、共産主義とは？ 団結とは？ 中絶とは？ さすが、イタリア・フランス映画は面白い問題提起を……。

フィデルよりも、カストロの方が……

この映画のタイトルになっている「フィデル」とはフィデル・カストロ、つまりチェ・ゲバラと共に立ち上がったキューバ革命によって、1959年にアメリカの喉元に社会主義政権を打ち立てた革命家の名前。彼は今なおキューバ共和国国家評議会議長兼閣僚評議会議長だが2006年の腸の手術により、現在は弟のラウル・カストロが一時的にその権限を委譲されている。

日本ではフィデルよりもカストロの方がよく知られているから、タイトルもその方がよかったのでは……？

あの時代は、私の学生運動の時代！

私が大学に入学したのは1967年4月。そして以降、3年弱の間はドゥッブリと学生運動に浸っていたから、この映画に描かれる①スペインのフランコ独裁政権、②フランスの5月革命、③チリのアジェンデ政権という言葉には懐かしい響きがある。

お手伝いさんも、国際色豊か

この映画には3人のお手伝いさんが順次登場する。最初のフィロメナ（マリー＝ノエル・ボルドー）はキューバ革命を体験したキューバ人、2番目のパナヨタ（クリスティアナ・マルクー）はギリシャ軍事政権からフランスへの移民、3番目のマイ・ラン（ティ・タイ・ティエン・グエン）はベトナム戦争の戦火から逃れてフランスに渡ったベトナム人、と国際色豊かなうえ、3人ともそれぞれ大きな国家の変革を体験している。そのため、この3人のお手伝いさんは主人公のアンナ（ニナ・ケルヴェル）に対して大小さまざまな影響を与えることに。

ブルジョワ家族に、ある日大異変が……

この映画の原作は、ドミティッラ・カラマイの『TUTTA COLPA DI FIDEL』ということらしい。そして、プレスシートによれば、それは平和に暮らしていたブルジョワ一家がコミニズム（共産主義）の洗礼を受け、その理想のために次第に変化していく過程を描いた物語とのこと。

その原作にあるブルジョワ一家をスクリーン上に置き換えたのが、主人公のアンナ一家だ。父親のフェルナンド（ステファノ・アコルシ）は、スペイン貴族階級出身で弁護士。母親のマリー（ジュリー・ドパルデュー）は雑誌記者。この家族が住むのは庭つきの大きな家で、お手伝いさんもいる。そして、バカンスはボルドーに住む祖父と祖母のお城のような家で過ごしている。また、アンナは名門のカトリック女子小学校に通う成績優秀なお嬢サマで、いつもかわいいワンピースを着て、弟のフランソワ（バンジャマン・ファイエ）と共に家族4人ハッピーなブルジョワ生活を楽しんでいた。

ところが、ある日突然、フェルナンドが共産主義に目覚めたから大変……。

フェルナンドが目覚めたのは……？

フェルナンドが共産主義に目覚めたきっかけは、長年フランコ政権を相手に反政府運動を行っていたキノ伯父さんが亡くなり、残されたマルガ伯母さん（マール・ソデュップ）と従姉妹のピラル（ラファエル・モリニエール）がアンナの家にやってきたこと。これをきっかけに社会的意識に目覚めたフェルナンドは激変！

その変化には多少マンガ的な面もあるが、突然アンナとフランソワを残してマリー

と共にチリに旅立ったのにはビックリ！ これは1970年のチリの大統領選挙に立候補した、左翼連合のサルバトル・アジェンデを応援し、南米初の民主的手続による社会主義政権の実現を目指すための行動。フェルナンドとマリーのチリ滞在は予想より長引いたばかりか、ようやく帰ってきた2人はすっかり Kommunismus（共産主義）の洗礼を受け、ヒッピーのような風貌に。

これでは、子どもたちは大迷惑……？

マリーもフェミニズム運動に

日本は、1948年の「優生保護法」の成立と戦後の「性の自由化」によって世界一の人工妊娠中絶天国(?)になっているが、イギリスではそれが大変だったことは、『ヴェラ・ドレイク』（04年）を観ればよくわかる（『シネマルーム8』335頁参照）。それはフランスでも同じで、プレスシートによれば、1974年にヴェイユ法と呼ばれる中絶法が採択されるまでは人工妊娠中絶は法律で禁じられていたため、中絶手術は非合法で行われていたとのこと。

フランスでのそんな女性運動、フェミニズム運動の高まりの中、マリーも「343人の宣言」に署名することになったから、そこでたちまちフェルナンドと言い争いに。また、自分の本をつくるため、「中絶の証言者」たちのインタビューを自宅で行うようになったから、アンナたちも大変。

権利意識に目覚め、いろいろ活動範囲を広げていくのはいいのだが、その影響はあちこちに……。

アンナの成長がこの映画のポイント！

子供は親の私物ではないから、あまり親の政治的立場を押しつけるのはいかがかと思うが、フェルナンドとマリー夫婦をみていると、子供のことも自分たちのことを優先しているように思えるのは、やはりヨーロッパの子育て論と日本のそれとの違い……？

フランス流は何をしようと親の自由だとしても、突然お屋敷から小さなアパートに引っ越ししたり、大好きだった宗教学の授業を受けられなくなったり、家にはひげづらの怪しげな男たちが自由に入出入りしたり、挙げ句の果てはデモ行進に一緒に行かされて機動隊に追われたり、アンナと弟のフランソワは大変。フランソワは無邪気にそん

な変化を受け入れているようだが、既に自我が十分育っているアンナがそんな両親に反発したのは当然。

そこでアンナがえらいのは、「キョーサン(共産)主義」や「ダケツ(団結)」「チューゼツ(中絶)」など、ワケのわからない言葉や概念を積極的に聞いて知ろうとしたこと。もっとも、ひげのおじさんが富の平等配分について、「君のパパは、ひとつのオレンジを皆で分け合おうという考えだ」と説明しているが、これはかなりいい加減……？

そんなこんなの出会いや出来事の中、成長していくアンナがこの映画最大の見どころ。

500人近くのオーディションで選ばれたという1997年生まれのニナ・ケルヴェルはもちろん映画初出演だが、ふくれっ面の表情を中心として(?)見事な演技を。

2007(平成19)年12月13日記

アフガン戦争やイラク戦争は、全部アツシユのせい？ 奇妙な邦題はそんな意味。フィデルとはフィデル・カストロ。つまり、一九五九年に盟友チェ・ゲバラと共にキューバ革命を成功させ、今なお病身ながら最高指導者として君臨している英雄だ。

舞台は七〇年のパリ。九歳の少女アンナは典型的なお嬢さまだが、突然テリに旅立った弁護士のパパと雑誌記者のママは、共産主義的思想の影響を受け、左翼連合のアジェンテ政権誕生のために大奮闘！戻ってきた時はまるきりヒッピー。お陰でアンナはお屋敷からアパートへの引っ越し、反フランクのデモ進参加と散々な目に。これは全部フィデルのせい？



ぜんぶ、フィデルのせい

明日から梅田ガーデンシネマで公開



少女の目線で
世界と社会の勉強を！

わたしが大学時代を過ごした七〇年前後の世界は、
①フランス五月革命のチリ
②アジェンテ政権③ギリシヤ軍事政権④スペイン・フランコ独裁政権⑤ベトナム戦争と激動の時代。そんな七〇年代、パパは共産主義と人民団結で、ママは女権

向上中絶容認で大忙しが、アンナにはその論争の意義と内容はイマイチ？しかし、髪のおじさん「君のパパは、ひとつのオレンジを皆で分け合おうという考えだ」という富の公平配分論は少し納得。すると、フィデルは悪くない？
ふくれっ面がキュートな少女アンナの目線で見る世界や社会の動きは新鮮だ。七四年にアジェンテ大統領はクーデターの中で死にじしてしまっただが、その間のアンナの成長ぶりには？
福田政権下、安倍前首相が提唱した教育再生会議の答申はすっかりお茶を濁したものになりそうだが、日本の中高・大学生もアンナに負けないよう広く世界や社会を勉強しなければ(写真は一場面)。

大阪日日新聞 2008(平成20)年1月18日

「ふるさと納税」の活用を！

個人住民税の寄付金控除を大幅に拡充することを内容とする地方税法の改正によって、08年4月30日から「ふるさと納税」制度がスタートした。これは自分の好きな自治体を選んで寄付すれば、寄付金のうち5千円を超える部分について個人住民税所得割の概ね1割を上限として所得税と合わせて全額が控除されるもの。その限度で、どの自治体に住民税を納めるのかを自由に選択できるところがミソだ。他方、5千円は寄付者の負担となるため、それを補填し、「おらが市町村」に寄付してもらおうと、各自治体は5千円相当の特産品をお返しするなどの工夫を凝らして獲得合戦をくり広げている。

しかし、5月27日付読売新聞夕刊によると「制度1か月 近畿16件185万円」と出足は低調。また人口9万人の芦屋市は、1人当たりの納税額が27万円と全国一だが、阪神タイガースの金本知憲選手（推定年俸5億5千万円）など高額納税者の大半を占める市外出身者が「ふるさと」に多額の寄付をすると、数億円の減収となる恐れがある。他方、「大阪ミュージアム構想」をぶちあげ、大阪市への寄付を呼びかけた直後に、府内の男性から百万円の寄付

があったというから、橋下徹知事のアピール力は大きい。

私のふるさと愛媛県松山市では、中村時広市長の強力な掛け声によって「『坂の上の雲』のまちづくり」というユニークな活動が展開されている。司馬遼太郎の原作にもとづくNHKスペシャル大河ドラマ『坂の上の雲』が現在撮影中だから、09年秋から3年間にわたってオンエアされれば秋山好古・真之兄弟や正岡子規の名前はもっと有名になるはず。そんなユニークなまちづくりを順調に進めるために金はいくらでもほしい、松山市としてはそんな心境だろう。

08年5月25日に開催された愛媛県人会の総会でも「ふるさと納税」への協力が呼びかけられたが、残念ながら松山市でも出足は低調。そんな中、松山を愛している私は5月30日『坂の上の雲』のまち松山応援寄附金に△△円を寄付したが、これが松山市におけるふるさと納税第2号とのこと。さて、私のふるさと納税分が松山のまちづくりにどのように使われるのか、「As a Tax Payer」として、しっかり監視しなければ。

2008（平成20）年6月19日